思斉のしせい

大阪府立思斉支援学校　支援室だより
第55号　　令和４年５月16日

今回も、少し支援教育から外れるのですが…。みなさんはベルナルド・ベルトルッチ監督の「ラストエンペラー」という映画をご存じでしょうか。中国、清朝最後の皇帝である「愛新覚羅溥儀（あいしんかぐらふぎ）」の生涯を描いた作品です。

作中、溥儀が10代の頃、視力が落ち失明の危険があることから医師に眼鏡を勧められるも、保守的で旧態依然な臣下たちから猛反対されるシーンがあります。家庭教師の尽力により、最終的に彼は眼鏡を許され、目が悪くても問題なく日常生活を送ることになるのですが、これは言い方を変えれば、視力が弱いという彼自身の心身機能は変わらずとも、視力が弱いことで生じる生活上の障壁・困難を、彼は眼鏡を用いることで克服したと言えます。

しかし、もし周囲の反対や無理解が勝っていたらどうなっていたでしょうか？彼は目の見えない不自由な生活を強いられていたか、あるいは仮に眼鏡を使ったとしても、後ろ指をさされ続け、生きづらかったかも知れません。

社会モデルでは、個人の心身機能ではなく、個人と社会との関係性の中に生じる障壁を「障がい」と捉えます。上記の例では、溥儀の目が悪いことが問題なのではなく、そんな溥儀が眼鏡を使うことに対して周囲の理解がなく、あまつさえ反対されるという環境、社会的な障壁が「障がい」ということになります。

こういった社会的障壁には「物理的な障壁」「制度上の障壁」「文化・情報の障壁」「心の障壁」の４つがあると言われています。

物理的な障壁：施設や設備上の物理的な障壁がある状態
（例）階段のみの通路、狭い改札口、車いすで使用できないトイレ等

制度上の障壁：法令・制度等によって機会の均等が失われている状態
（例）墨字のみの入試問題、電話や来店のみの受付、施設や店に盲導犬同伴で入れない等

文化・情報の障壁：情報の伝え方が不十分で、必要な情報が平等に得られない状態
（例）字幕のない放送、単一言語での緊急警報、タッチパネルのみの操作盤等

心の障壁：差別や偏見、無理解・無関心によって社会参加が阻害されている状態
（例）「かわいそう」といった偏見、点字ブロック上に障害物を置く等

これらは多くの場合、マイノリティを意図的に排除しようとして生まれたものではなく、マイノリティに対する無関心や、マジョリティのみが当たり前のように優遇されている社会の仕組みを意識できていないことから生まれています。

見えなかったものが見えるようになること、気づけなかったことに気付けるようになることは、非常に難しいことです。人は様々な経験を積めば積むほど、自身の中に固定観念が形作られ、そこから外れた視点を持ちにくくなるからです。しかし、時としてその固定観念が自分以外の誰かを孤立させてしまうかも知れません。一人ひとり違う子どもたちの教育に関わる私たちだからこそ、常に自分自身を見つめ、自分の中の「当たり前」を疑ってかかる必要があるのかも知れませんね。

担当：支援室　上田 哲司